



特集：愛着の問題を抱える子どもへの心理支援



愛着の問題を抱える子どもへの心理支援

～心理療法担当職員役割と課題～

■児童養護施設

暁学園	吉田 志保
プティヴィラージュ	柴田 一匡
	飯尾 桜子
豊橋平安寮	小林 美文
岡崎平和学園	坂口 悠一郎
知多学園 松瀬荘	青山 紗親子
蒲生会大和荘	浅井 美帆

■乳児院

豊橋ひかり乳児院	村松 遥
----------	------

■児童心理治療施設

中日青葉学園 わかば館	山本 秋子
愛厚ならわ学園	三輪 夏樹
	荻野 裕二

1. はじめに

(1) 児童福祉施設への心理職員配置の歴史

暁学園 吉田 志保

児童養護施設については、平成11（1999）年に厚生省（現 厚生労働省）が「児童養護施設における被虐待児に対する適切な処遇体制の確保について」という通知をだし、非常勤の心理療法担当職員（以下、心理職員）が配置されるようになり、平成18（2006）年には、常勤として配置できるよう予算が組まれるようになりました。また、平成13（2001）年には乳児院、母子生活支援施設、平成18年には児童自立支援施設、平成21（2009）年には障害児施設にも心理職員が配置できるようになりました。その配置については、心理療法を行う必要があると認められる児童10人以上につき1人となっています。児童心理治療施設（前 情緒障害児短期治療施設）への心理職員の配置については、児童5人以上につき1人となっています。現在、多くの児童福祉施設において心理職員の配置が進んできており、被虐待経験を持ち、愛着の問題やトラウマ等を呈する児童への心理的ケア（心理療法、生活場面面接等）や施設で働く他の職員に対する助言への期待が高まっています。



(2) 児童福祉施設の心理職員の職務について紹介

児童福祉施設の心理職員の職務について、3施設を取り上げて紹介します。

児童養護施設

プティヴィラージュ 柴田 一匡

プティヴィラージュの心理職員は、①心理アセスメント（心理検査）、②心理療法、③性（生）教育、④生活場面面接（生活棟での子どもとの関わり）、⑤心理コンサルテーション（心理学の視点からの助言）、⑥関係機関（児童相談所、医療機関、学校など）との連携を担っています。心理職員は2人（男性1、女性1）雇用されており、思春期の子どもの心理療法は同性の心理職員が受け持つ、生活場面では心理療法を担当していない子どもとも意識して関わるなど、複数雇用ならではの工夫をしています。取り組みについて、近年は、性（生）教育「プティ会」を立ち上げ、生活担当職員（保育士や児童指導員を指す。以下も同様）とチームを組んで子どもへの心理教育を行っています。心理職員の職務はすべて連動しており、子どもに実施した心理検査や心理教育の結果を、子どもの了承を得て、心理コンサルテーションや関係機関との情報共有につなげるなど、子どもをはじめ支援者や関係者に還元できるように努めています。



乳児院

豊橋ひかり乳児院 村松 遙

豊橋ひかり乳児院における心理職員の主な仕事として、発達検査とタッチケアを行っています。発達検査は、入所児童全員を対象に行い、子どもの発達の伸び、遅れ、偏りなどを把握し、生活担当職員に伝えていきます。タッチケアでは0歳の子どもの対象に、歌いかけながら、マッサージをしています。そして、生活担当職員に、ふれあいの大切さを再認識してもらえるように、タッチケアの意義を伝えていきます。触れ合うことで「オキシトシン」というホルモンの分泌が増えると言われています。「オキシトシン」は愛情ホルモンとも呼ばれ、愛情の絆を築くために大切なものです。乳児院に入所している時期は、人との関係の土台を築く大切な時期です。乳児院の心理職員に求められるのは、子どもに直接働き掛けることよりも、生活担当職員と子どもの関係性に働き掛けることだと思います。心理職員の視点から、子どもの発達や関わりのポイントなどを伝えることによって、子どもと生活担当職員がより良い関係を築くサポートが少しでもできればうれいのです。

児童心理治療施設

中日青葉学園 わかば館 山本 秋子

わかば館では、特定の時間と場所子どもと心理職員が過ごす心理療法が行われます。会話や遊びを通じて自分の気持ちを表出し、これまでの、あるいは現在の体験を整頓することもあります。回数を重ねる中でこれまでとは違う情緒的な体験をすること、子どもが感じている困難さが減少し、「こうなりたい」という姿に向かうことを目指します。また、心理検査などを用いて特徴をとらえ子どもの理解につなげます。必要なスキルがあれば具体的な方法を提示し、一緒に練習することもあります。生活そのものも治療と考え、生活担当職員とともに生活場面に入ります。日々、さまざまなことが子ども自身の内側でも子ども間でも起こっているため、子どもの特徴や現状、予想されるこ

とを職員間で共有し、子どもが対人関係の中で気持ちや言動を調整していけるよう働き掛けています。

(3) 愛着の問題を抱えている子どもの心理

豊橋平安寮 小林 美文、暁学園 吉田 志保

愛着とは、主たる養育者との間で築かれる情緒的な絆で、生後6カ月から1歳半ごろまでが愛着形成にとって重要な時期とされています。この愛着が虐待等により健全に形成されないと、さまざまな問題となって表れてきます。児童福祉施設で働く職員は愛着の問題を抱えた子どもへの対応の難しさに苦慮しており、1年目の職員だけでなく経験を積んだ職員でさえも時に対応に迷うことがあるかもしれません。例えば、誰にでも構わずべたべたと抱きつくとか、誰とも親密な関係を築けないうえに孤立しているといった関係性の問題が表れます。周りから見たらゴミだと思われるようなものを部屋いっぱい収集したり、高齢になっても夜尿がおさまらなかつたり、指しゃぶりや爪かみ等がやめられなかつたり、叱られると分かっていながらも問題行動や挑発行動をしてみせたり、自傷行為、万引きといった犯罪行為、暴力、性問題などあらゆる言動で周りの大人たちを困惑させることがあります。また、子どもの否定的な自己イメージや極度の不自信、過剰な不安や怒り、攻撃性、欠如した共感性や罪悪感にも愛着の問題が影響しています。

虐待を受けた子どもの愛着について、新井康祥医師(朋9号、2018)は、「ゆがんだ愛着」すなわち「トラウマティックボンディング(虐待の絆)」の概念を挙げ、「治療は、対人関係の問題を乗り越えていく過程を通して、虐待によって植えつけられた誤った認識を塗り替え、新たに健康的な愛着関係を築くことが目標」と述べています。幼い頃に愛着が形成されないと、その後形成できないということではなく、その後に関わる人との関係の中で新たな愛着関係を育んだり、ゆがんでしまった愛着を修復していくことが可能です。そこで、施設では子どもが健康的な愛着関係を取り戻すために、治療的な養育-良質な日常生活と修正的関



わりーを実践していくことになります。ここでは、心理職員が施設において行っている子どもの愛着に注目した心理支援について紹介します。

引用：新井康祥（2018）. 子どもたちの心に届く関わりについて～親から受けたところの傷に他人がどう治療的に関わるか～, 愛知県児童福祉施設長会広報委員会編「朋9号」, 23-26. 愛知県児童福祉施設長会

2. 愛着の問題を抱える子どもへの心理支援

愛着の問題を抱える子どもに、心理職員は多面的なアプローチを行っています。

(1) 心理アセスメント

暁学園 吉田 志保

暁学園では、幾つかのアセスメント様式を用意して、子ども本人およびその家族についての情報を収集し、愛着の問題を含む本人の心身の状態や家族、社会関係を評価しています。その中では、特に家族図（樹形図）と暮らしていた家の間取り図を重視しています。子どもたちがどんな暮らしをしてきたか、そこで誰とどんなつながり、分離、別離があったか、どういった傷つきや不信感を抱えているかなどを、子どもの語りを通じてできる限り把握することに努めています。子どもの中には、自分の経験を話していく中で抱えていた不安や解離、トラウマ症状が少しずつ治まってくる子がいたり、逆に、今まで表現できなかった怒りや攻撃性を表現するようになる子がいたりします。また、児童相談所が親から聞き取ったものとは異なる家族関係が語られたり、入所時には把握されていなかった性被害やDVの目撃、いじめられ体験などが話されることもあります。子どもたちは、施設での生活の中や職員、他児との関係においてさまざまな問題を出してきますが、入所以前の家族関係や暮らしについて詳細に情報が記録されていることで、子どもの問題の理解と改善や子どもと職員の関係形成に役立っていると実感しています。

アセスメント様式の1つに「子どもの基本的権利・親（おとな）の責任と義務」という書式があり、記入用紙は「あなたに安心はあったかな？（衣食住が日常的に満たされていたか、安全の確保、居場所の確保、愛情の実感）」、「あなたに自信はあったかな？（自尊心が満たされているか、ほめられ経験、大切にされた実感）」、「おとなは間違っていないかったかな？（おとなのモデルとしてのふるまい、プライバシーの確認、しつけ、体罰）」という3つのテーマに分かれています。書式には質問例があり、それを参考にしても、子どもの様子を観察しながら質問を加えたり減らしたりして子どもと話をしています。心理職員が聞き取った内容は、ケース検討会議や職員会議等で他の職員と共有します。また、児童相談所にも報告しています。

参考：藤澤陽子（2004）. 「暁学園の子どものアセスメント面接プログラム」児童虐待防止対策支援・治療研究会編「子ども・家族への支援・治療をするために―虐待を受けた子どもとその家族と向き合うあなたへ」, 121-128. 日本児童福祉協会

(2) 心理療法

愛厚ならわ学園 三輪 夏樹

施設で出会う子どもたちの多くは人とのくっつき方がとても不器用で、周りの人とうまく関係を築くことができず、子ども本人も周りも苦しい思いをしています。生い立ちの中で1対1の密な関わりを十分に経験していなければ、人とつながる力は育たず、周りとの関係に悩むのは当然でしょう。心理療法をやれば良いというわけではありませんが、彼らの生い立ちを踏まえると、施設という閉鎖的な空間での生活の中に自分のための時間があること、普段の生活から離れ、非日常的な空間で過ごせること、途切れずに関わり続ける存在がいること自体が必要な体験ではないかと思われます。

心理職員が生活場に入り、子どものトラブルの仲



歳や指導にあたる施設もあります。心理療法と生活場面をまたいで心理職員と子どもが関わるため、その境界が曖昧（グレーゾーン）になります。生活場面でのやりとりが心理療法の延長になってしまったり、心理療法の中で生活指導的なトーンで話してしまったりすることもあり、グレーゾーンの中でも「枠」を意識することが心理職員側に求められます。ただ、生活場面で子どもが心理職員を見かけて駆け寄って来たり、「また今度聞いてね!」と言ってきたりする姿を見ると、このグレーゾーンもまた意味があり、子どもたちを支えることにつながっているのかもしれないと感じます。家族交流後や指導の後で落ち込んでいる子どもや、自分の問題に向き合えずにいる子どもが心理職員との接点を求め、安心感を得ようとする行動には意味があり、親にくっついて泣き止む赤ちゃんのようでもあります。しかし、一方では心理療法と生活場面との区切りが曖昧になり、「担当を変えろ!」「もう行かない!」などと心理職員への不満を生活場面で言われたり、あからさまに無視をされたりすることもあります。「分かってもらえた」体験がなければ加減は分からず、ついでが過ぎ、心理職員も子どもと同じような傷つきを体験します。ただ、愛着の問題を抱えた子どもだからこそ、ぶつかったり、関係が途切れそうになったりしながら、それでも心理職員が生き残り、また心理療法の時間に待っていてくれることには意味があるのだと思います。そして、時には気まずさを感じ、その気まずさも含めて心理療法の中で心理職員が抱えていくことが、子どもにとって安心感を育むことや人とつながっていく力を伸ばしていくことにもつながるのではないかと思います。

(3) ソーシャルスキルトレーニング

岡崎平和学園 坂口悠一郎

児童養護施設に入所している子どもの多くが愛着の問題を抱えており、その支援の在り方が課題となっています。現在、岡崎平和学園では子どもへの心理支援の1つとして、「自分の気持ちをうまく表現できない

子ども」「他の子とうまく関われない子ども」などの愛着形成に課題がある子どもを対象にソーシャルスキルトレーニング（以下、SSTと表記）を実施しています。SSTとは、社会で必要とされる技能や対人行動を身に付けるための練習や訓練を言います。

SSTの内容としては「人との話し方」から始まり、「気持ちの理解、コントロール」などのテーマを設定し、毎週決まった曜日、時間で1年を通して計画的に実施しています。その効果として、トラブルの多かった参加メンバーの中でコミュニケーションの変化が見られるようになってきました。SST内で意見がぶつかり、感情的になってしまった時に、子ども間で話し合いをし、解決していく姿がだんだんと見られるようになってきました。また、SSTで行ったことを生かして、言い方、声のトーン、態度といった部分を相手に受け取りやすい形で表現することができるようになってきました。そこから、自分が伝えたいことを相手にスムーズに伝えられるようになりました。

このような変化が見られるようになったのは、毎週同じ時間、同じメンバーで学んでいくことで、子ども同士で「学び」を実践し共有することができたためだと思います。SSTでは、児童養護施設での集団生活という特性を生かして、子ども同士が互いに学び、成長しあうための力を培っていきたく考えています。今後の児童養護施設では、心理支援の幅を広げ、子どもへの選択肢を増やしていくことが大切だと感じています。

(4) 心理的学習、進路支援

ブティヴィラージュ 柴田一匡

厚生労働省（2013）の調査によると、学業の状況について遅れがある子どもの割合は、児童養護施設28.2%、児童心理治療施設51.5%、児童自立支援施設59.3%に上るとされます。被虐待経験のある子どもや、知的、発達障害を抱える子どもの入所率も高く、児童福祉施設に入所する子どもが抱える問題や特性から、学業に集中して取り組むことには困難を伴うことが推察できます。



学習支援は心理職員の専門外のように思われているかもしれませんが、心理アセスメントを生かして子どもの心理面に配慮した学習支援の在り方を検討、提案することができます。例えば、心理検査を活用して、子どもの読み書き計算の能力や学習の到達度を測り、その子どもの能力や到達度に合わせた学習方法を提案しています。具体的には、子どもの得意不得意な力を細かく分析し、計画能力が低い子どもへは学習日課表の作成と導入、読む力に遅れがある子どもには音読を習慣化させる、などの手立てを方針として導き出します。また、心理職員は実際の学習場面にて子どもを観察する機会も作り、その様子から集中力が持続しない多動傾向の子どもには学習環境を調整したり（例：椅子に座らせるなどの配慮）、1ページごとに休憩をはさむ工夫を行ってもらうなど、生活担当職員と連携して子どもの学習支援を行います。

学習支援と連動して、進路の問題にも心理職員は取り組んでいます。進路の問題という進路選択のための指導に主眼が置かれがちですが、入所している子どもの抱える問題を考慮すると、自分は将来どうなりたのか、どう生きていきたいのか、そのために学習にどう取り組みたいのかといった子どもの意思決定やそのための気持ちの整理をサポートすることが重要です。受験への不安だけでなく、進路を考える上で直面せざるをえない家庭引き取りの有無や施設入所に至った経緯の再確認などの複雑な事情の中で、子どもが抱える想いを丁寧に聴き、受け止めたり、一緒に悩んだりすることで、子どもが自分の将来に少しずつ向き合えるようになっていくと考えます。

参考：厚生労働省雇用均等・児童家庭局（2013）．児童養護施設入所児童等調査結果（平成25年2月1日現在）

(5) 性（生）教育

プティヴィラージュ 飯尾 桜子

児童福祉施設において、性の問題にどのような取り組みかは大きな課題となっています。性の問題が起きる

背景には、個々の子どもが抱える問題や集団の特異性、施設の構造、職員配置などさまざまな要因が考えられます。愛着の問題もその要因の1つです。自分と他者の領域の境界線や距離感が曖昧になってしまうと、他者との身体的距離が近くなりすぎたり、関わりたいという気持ちが直接的な身体接触となってしまうことがあります。また、他者を支配しようとする方法として性暴力が行われることもあります。さらに、虐待などのさまざまな心身への傷つきを体験してきた結果として、自分に自信を持てず、生きていくことすらままならない子どももいます。多様で複雑な課題を抱える子どもたちが、安心、安全な暮らしができるよう、子どもに性についての正しい知識を伝えることは必要不可欠だと考えています。合わせて、子どもの自己肯定感を高め、自分も他者も大切にできる力を育む「生」の教育を行っていくことも重要だと感じています。

プティヴィラージュでは、生活担当職員と心理職員で「性（生）教育担当グループ」を構成し、入所している子ども全員を対象に「プティ会」と呼ばれる性（生）教育を実施しています。年齢別に5つのグループに分け、それぞれ年間4～8回のプログラムを組んでいます。プログラムの内容は、「いのちの仕組み」「自分を大切に」「人との関係」「現実の身を守る」という4つのテーマを軸に作られています。中でも「いのちの仕組み・産道体験」という回では、いのちの仕組みについて伝え、簡単な産道体験を行い、職員が作成した「うまれてきてくれてありがとうカード」を渡し、周りの人たちに祝福されて生まれてきたことの追体験を行っています。生まれてきたこと、生きて





いることに喜びを感じられるようなメッセージを伝えることを大切にしています。

心理職員は、子どもの関係性を考慮してグループの構成案を示したり、虐待体験のある子どもに個別の配慮をしたりしています。また、性(生)教育は、日々の生活の中で子どもと関わる職員が繰り返し伝えることでより有益なものとなっていきます。心理職員は、生活担当職員にプティ会での子どもの様子について詳しく伝え、子どもの状態を生活場面で細かく把握してもらったり、次回に生かせるようにしています。

(6) 生活場面面接

松籟荘 青山 紗規子

生活場面面接とは、日常生活の中で行われる面接です。生活場面で起きた出来事や問題を取り上げながら子どもと話をすることで、子どもの成長につなげていくという意図があります。生活担当職員が日々行っている面接でもありますが、ここでは、心理職員が生活場面面接をどのように行っているかを紹介します。

心理職員が生活場面に入って子どもが起こす行動や問題を直に観察することで、個別の心理療法では捉えきれない子どもの特性や様子を把握することができ、愛着の問題をはじめとした子どもが抱える課題は、日常の対人関係に如実に表れてきます。生活場面で子ども同士の関係や職員との関係を把握することで、子どもの状態について理解を深めることができます。心理職員は、心理療法で用いている技法を生活場面面接に生かして子どもと関わりを持ちます。具体的には、子どもが生活場面でトラブルやパニックを起こした際に、子どもが気持ちや言葉にできるような声掛けをしたり、出来事の整理ができるように働きかけます。また、どう行動できるとよかったか、どうしたら抑えられたかなどを一緒に考えることもあります。心理職員が子どもにどのような声掛けや関わりをしているかを生活担当職員に見てもらうことで、日常の関わりの中に同じようなやり方を織り込んでもらったこともあります。また、生活担当職員が抱えている子ども

への指導・支援の困難さをより共有しやすくなるので、問題解決に向けた多職種間の具体的な話し合いにつなげていくことができます。

ただ、個別の心理療法を行っている子どもに対し生活場面面接を行う際は、注意と配慮が必要になります。心理療法で攻撃性や怒りが表出されていて、それを心理職員が受け止めている時に、日常場面でも同じ言動が出たからといって同じように受け止められるかというと、そうはできません。日常をさらに混乱させることになってしまいます。心理職員は、「日常」で扱うことと「非日常」で扱うことの違い(枠)をしっかり意識しておくことが重要です。子どもの日常をおびやかす可能性があるならば、心理職員は関わりを控え、生活担当職員との生活場面面接を支える役割(心理コンサルテーションなど)にまわることも考えなければなりません。生活場面面接は柔軟性、即時性が大きな強みです。施設の状態や子どもの特徴をよく観察しながら、生活場面面接の在り方を模索していかるとよいと思います。

(7) 心理コンサルテーション

豊橋平安寮 小林 美文

心理コンサルテーションとは、心理学の知識を持つ心理職員と、子どもと関わる他の専門職が、援助対象である問題状況について検討し、よりよい援助の在り方について話し合うプロセスを言います。心理療法を行っている子どもの生活担当職員と支援方法について話し合ったり、心理職員が直接的な関わりを持たない子どものケースについても相談することが多くあります。また、職員を主体とした問題(仕組みづくり)について話し合うこともあります。

愛着の問題を抱えた子どもの状況について検討するには、まずは生活担当職員と心理職員とで子どもの情報について整理をしていきます。運動、認知、言語、コミュニケーション、社会性、障害の程度、家族関係、育ち、特徴など必要な情報を収集し、子どもの問題だけに注目しがちなところに新しい視点を取り入れま



す。それに加えて毎日の子どもの生活の記録を参考にして、問題が起こる要因を探ります。大切なことはそれぞれの専門職が情報を共有することです。ほんの些細な行動やいつもとは少し違う行動など、子どもの小さな変化を多職種間で共有することが1つの気付きにつながっていきます。子どもの問題の背景には組織としての仕組み作りが課題となっていることもあります。ほんの少し体制を見直すだけで子どもの支援がスムーズになるかもしれません。

子どもに関する情報を集めること、その情報をチームで共有すること、さらにチーム一人一人の思いや考えを引き出しつなげていくことが、心理コンサルテーションを行う上で大切なことです。心理職員が「答え」を出すのではなく、それぞれの専門職の強みを生かせるように情報を整理し、引き出し、つなげていくことでチームとしての「答え」を見つけ出すことができると考えます。

(8) 保護者支援

愛厚ならわ学園 萩野 裕二

「子どもが児童福祉施設を利用する」と聞いた時、どのようなことを思い浮かべますか。まず、子どもが保護者のもとを離れなければならない事情について思い巡らすのではないのでしょうか。そして家庭外に身を置く子どもの境遇や心情、これからどうなるのかを思うかもしれません。一方、子育てについて保護者が抱いていた苦悩や心労、その境遇について先に思い浮かべる人は少ないかもしれません。しかし、児童福祉施設での保護者支援においてももっとも大切で基本的なことは、「保護者の立場に立って考えること」だと言えます。

我々が子どもや保護者と出会うことになる「施設入所」という事態は、同時に「親子の分離」を意味する大きな節目といえます。保護者は「養育者」としての立場が大きく揺らぎかねないほどの大きな傷つきと引き換えに、養育や家庭内の私的でデリケートな問題に対し、社会的なサポートを受け入れて乗り越えようと

する大きな決断をしています。子どもとの分離は、これまでの日常の喪失であり、社会生活の中で影を背負ってしまったように感じる保護者もおられるかもしれません。この「養育者としての自分」を保つことが難しくなるような局面において、子どもの養育にあたる支援者と新たに関係を取り結ばねばならないのが「施設入所」です。

保護者は望まない出会いの中で、やり場のない複雑な心情を抱え、子どものために関係機関と協働していかなくてはならない息苦しい状況にいます。そこにどのように向き合っているのかは、施設で保護者支援にあたる職員との関係にそのまま表れるかもしれません。親子ともその後の人生をかけて整理していかなくてはならないほどの事態に対して、職員は保護者の立場に立ちながら、その心情に追っていきます。また、職員は子どもの状態を翻訳しながら、子どものニーズと保護者のニーズが合流する「保護者支援」の水域で舵取りをし（緊張をはらんだ局面もあるかもしれません）、現実的につながることでできる「家族の形」をともに探っていきます。

保護者と支援者が分かり合い、手を取り合うことは簡単ではありませんが、そもそも子育ては社会の中でいろいろな立場の大人との関わりの中で成立していくものです。子どもの幸せを願って手を取り合える大人同士の関係の中で助け合い、大人も含めてよりよく生きる道を探っていくことが「福祉」なのだと考えています。

※本文は、親子関係再構築支援 実践ガイドブック（厚生労働省、2017）に執筆したものに加筆、修正をしています

(9) 関係機関との連携

蒲生会大和荘 浅井 美帆

個別の心理療法は、基本的に1対1で心理職員と関わり、自分だけに関心を注いでもらうことができる環境であるため、愛着の問題を抱えている子どもにとってとはとても貴重な時間となっています。その時間が子ど



るとよいかを手探りで見つけていけなかつたり、生活業務を兼任する中で心理士としてのアイデンティティが揺らいだりすることもあります。経験年数の浅い心理職員においては、生活担当職員への心理コンサルテーションに悩むこともしばしば見られます。このように、施設において心理職員がその専門性を生かして有効活用されるには、まだまだ課題が多いのが現状です。

(2) 心理職員を生かしてもらうために

ブティ ヴィラージュ 柴田一匡

平成11年に施設へ心理職員が配置されてから20年がたちましたが、心理職員の役割や働き方はいまだに模索中であり、明確な職業モデルの構築が求められています。そこには、それぞれの施設の体制や方針によって心理職員に求められる役割が異なっているという事情もありますが、心理職員自身がフィールド型の支援、手段について十分な教育を受けていないことも要因の1つになっていることは否めません。また、心理職員は、「心を見透かしそう」「専門用語が難しい」「子どもを叱らない」「現場を知らない」など他の専門職からさまざまなイメージを抱かれてきました。それを謙虚に受け止めることも大事でしょう。

児童福祉施設にて心理職員が持っている心理学の知識や技法といった専門性を生かすためには、まずは心理職員が施設から求められている役割を理解する必要があります。しかし、児童福祉施設の心理職員は単独配置が多く、その役割と働き方について客観的な視点から検討する機会が乏しいといえます。施設で心理職員をさらに生かしてもらうために、心理職員間でも議論を続けていきたいと考えています。

そこで、平成30年度より、愛知県児童福祉施設長会主催の研修の中に「心理職員自主研修会」を組み入れていただき、愛知県の児童福祉施設に勤務する心理職員のネットワークを構築し、心理職員の活用に関する情報交換

を行ったり研さんを積んだりしています。研修会では、愛知県の児童福祉施設を会場にして施設見学を行い、施設長から心理職員への期待等をお話していただき、その後、心理職員による実践報告をもとに、日々の実践についてグループ討議を行いました。自主研修会を重ねる中で、心理職員が専門性を発揮するには、他の専門職との連携、協働が要であることが共有されています。子どもの日常生活がしっかりと作られていてこそ心理療法をはじめとした心理治療の効果が表れます。心理療法を実施するにも、その中で展開していることを、他の専門職に集団守秘義務のもとでフィードバックし、チームの一員として生活を軸に考え、子どもと職員を支える視点が大切です。心理職員がそのような意識をもって、心理アセスメント、心理療法、生活場面面接、心理コンサルテーションなどの心理学の知と臨床を生活につなげていくこと、また、性(生)教育や学習、進路支援など、幅広い領域に能動的に介入していくことによって、長年なされている心理職員が生活に入るか否かといった議論に惑わされずに、その施設の体制の中で心理職員の専門性が最大限に発揮できることでしょう。

そして、心理職員自身が燃え尽きてしまわないようにするためにも、来年度以降も自主研修会の開催を続け、心理職員同士の横のつながりを大切にしていきたいと考えています。

